

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2370200418		
法人名	有限会社ハッピートクガワ		
事業所名	グループホームちから館とくがわ		
所在地	名古屋市東区相生町16番地の1		
自己評価作成日	令和4年 9月 29日	評価結果市町村受理日	令和4年12月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.wam.go.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ごみ(和)の会		
所在地	名古屋市千種区小松町五丁目2番5		
訪問調査日	令和4年10月26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・かかりつけ医や看護師との連絡を密にしており健康面での安心につなげている。 ・入居者の思いを大切に一人一人の望む暮らしに近づけるように努力している。 ・職員と入居者が本当の家族のように接している。 ・職員の年齢や体力に応じた勤務時間や休みの取り方を考慮している。 ・職員全員が介護福祉士の資格保持している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>入居者が“あんしん”や“やすらぎ”を感じられる暮らしとは何かを検討し、業務優先になることなく入居者の声に耳を傾け、望む暮らしの実現に向けてケアを実践している。また、コロナ禍で面会制限がある中、入居したばかりの方の家族へは、本人の日頃の様子が分かるように、レクリエーション等に参加している笑顔の写真だけでなく、なんでもない日常の表情を数枚多くお便りと共に送付している。それらの取り組みが、家族へも浸透していることが家族アンケート結果から窺える。「入居者に寄り添う姿勢が優れている」「親身になって世話をしてくれる」「家族も安心していられる」等コメントを寄せており、ホームへの信望が大変厚い。</p> <p>その他、地域行事の中止や、外出や面会も制限されている中、ホーム内で浴衣を着て夏祭りサンタの衣装でクリスマス会、四季ごとの作品作りや行事にあわせた献立を提供し、季節を感じられるような取り組みや、体操の時間を増やし、運動不足解消に力を入れている。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	・職員が常に出入りしている事務所に掲示し意識している。カンファレンス等では理念に沿った話し合いをしている。	業務優先ではなく、入居者に寄り添い、語らう時間を大切し、信頼関係を築くことによって、やすらぎのある暮らしに繋がる支援をするよう会議時等に理念について、職員間で共有している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	・コロナ禍のため外出や他者との交流を制限している。	コロナ禍で、様々な地域行事が中止しているが、町内会長との情報交換や、以前はボランティアに来ていた近隣の専門学校の学生達からは、手作りカレンダーを作成し、毎月ホームに届けられるなど地域の繋がりを継続している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	・入所に関する電話相談に対応しいきいき支援センターを紹介した。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	・コロナ禍のため、文章による報告や意見の収集にとどまり、対面による話し合いは中止している。	いきいき支援センター担当者、東区の連絡協議会、民生委員、町内会長等の構成メンバーに意見照会を行い文書による会議を年6回開催し、ホームの現況報告や、情報交換を行っている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	・毎月「ちから館だより」を名古屋市役所の介護保険係に届けている。また制度に関することなど疑問点は電話で相談している。	コロナ禍以前は直接持参していたホームのちから館便りを、毎月、市役所介護保険課に送付し、日々の取り組みを伝えている。また、市主催のキャリアアップ研修に参加している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	・身体拘束防止委員会を年6回開催し全職に対しても繰り返し研修を行っている。又、身体拘束をしないために話し合い工夫しながらケアをしている。安全のために建物の玄関は施錠している。	ベッドからの転落の恐れがある場合に4点柵等の身体拘束を行わないために、ケースカンファを開催し、職員でケアの検討を行っている。年6回身体拘束適正委員会を開催し、同時に身体拘束をしないためのケアの研修や日頃の振り返りを行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	・虐待はもちろんのこと職員本意のケアにならないよう注意し話し合っている。年1回職員研修を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	・現在対象者はいない。管理者は研修等で学ぶ機会があるが職員はない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	・疑問点はないかと確認しながら丁寧に説明している。対象者の理解度に合わせてわかりやすい言葉遣いにも気をつけている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	・玄関に「ご意見箱」を設置している。コロナ禍で感染状況に合わせた面会方法を定めるに当たり、家族の意見を参考にした。	コロナ禍で面会の制限を設けているが、どのような面会を希望されているか、家族にアンケートを行い、玄関でのガラス越し面会や、集会室を利用、外での面会等、感染状況や、家族の意見を参考に対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	・効率のよい職員配置など職員の意見を考慮しながら決めている。	毎月の職員会議、ケースカンファ以外でも随時連絡ノートで意見提案を言い表せる機会がある。入居者と関わる時間を増やすため、業務の効率化に関する意見等、運営に反映している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	・年度変わりに施設独自の自己評価票を用いて面談を行い各自の評価をすると共に要望や意見を聞き、目標設定をしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	・コロナ禍で外部研修が受けにくくなっているため、施設内での研修が中心となっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	・同業者との交流の機会はなかった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	・アセスメントを参考に本人の好みや要望を取り入れて環境整備をしたり集団の中に入りやすいように配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	・不安に思っている家族へはこまめに連絡をして本人の様子を伝え、心配事が解消されることで安心して見守ってもらえるようになった。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	・入所時に健康面の心配をされていた家族に対して納得のいく受診をしていただき、体調確認ができたことでお互いに安心して入所をすすめることができた。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	・入所者が重度化しており、難しい面もあるが一部の元気な方々には家事をお願いするなど助けてもらっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	・コロナ禍で面会の制限が必要なため感染状況を見極めながら、家族の希望や意見を取り入れて面会方法を決めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	・コロナ禍で外出や面会を制限しており行っていない。	面会に制限がある中、家族との関係が薄れないよう、日常の様子を写真でおたよりと共に送ったり、電話の取次ぎの支援を行っている。入居してからの馴染みの関係として、訪問理美容や、入居者同士の関係作りの支援を行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	・日頃から利用者同士の関係性を観察し把握するようにしている。食事の席、レクリエーションの席、リビングの席など過ごし方を考慮しながら支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	・退居先には情報提供をし、問い合わせにも対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	・入居期間が長い方が多く、重度化と共に体調に合わせた過ごし方が必要になってきた。本人の意向に配慮しつつ無理なく過ごせるよう支援している。	廊下での独り言や、入居者同士の会話や職員との会話等、本人の言葉から思いを汲み取り、申し送りノートで共有している。また、本人の生活歴や家族からの意見を参考にし、本人本位の暮らし方に繋がるよう支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	・入居時のアセスメントで本人だけでなく、家族からの情報収集し記録に残して職員間で共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	・月1回の個別カンファレンスで職員の気付きなどを出し合いケアに生かしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	・6ヶ月ごとに計画の見直しを行っている。個別カンファレンスの記録を参考にしながら職員からも情報を得ている。	入居者の自発的な意見や、アセスメントから目標を設定し、計画書を作成している。短期目標に合わせて、計画の見直しを行い、3ヵ月毎にモニタリングを実施している。見直された計画は職員で回覧し、サービス内容を共有している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	・介護記録の他、連絡ノートを用いて情報共有している。職員は業務前にこれらの記録に目を通し統一したケアができるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	・個々のニーズに合わせて柔軟な支援やサービスを行っているが、多機能化には取り組んでいない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	・コロナ禍のため行っていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	・必要なアドバイスをしつつ家族の希望に沿った受診ができるよう支援している。	内科、皮膚科専門の協力医による往診が月に2回ある。他科への受診や希望のかかりつけ医への受診は家族または職員が対応している。また、月4回の訪問看護が訪問し、関係医療と連携を図っている。訪問看護師へは24時間連絡体制可能である。また、必要に応じて訪問歯科の診療もある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	・体調の変化に気づいた時はその都度FAXで報告し指示を仰いでいる。そのため早期の対応が可能となっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	・骨折で入院した利用者が病院に馴染めず退院を希望したため病院と相談して早期退院を受け入れたケースがあった。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	・家族の希望と施設でできることに差がある場合、早めに相談し納得のいく選択ができるよう話し合っている。	入居時に重度化に関する指針について説明を行い、また、その時々状態変化により、本人、家族と話し合い、ホームで出来ることを再度説明する。転居の希望があれば、転居先の見学、契約までの支援を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	・管理者が不在の場合も対応できるよう現場で経験を積ませるようにしているが一部の職員のみで定期的には行っていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	・年2回、夜間を想定した避難訓練を行っている。以前は地域の消防団が訓練に参加することもあったがコロナ禍で今は行っていない。	年2回夜間想定で避難階段降り口まで避難訓練を実施している。実際の災害発生時の協力体制について、消防団と町内会と話し合いが出来ている。備蓄については水・食料2週間分の他、ヘルメット、カセットコンロ、ラジオ等を備えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	・言葉かけの乱れは虐待につながるとくり返し研修で職員に伝えておりお互いに注意し合うようにしている。	年間研修計画に、毎年、接遇やプライバシー保護について位置付けて研修を開催している。排泄時の声掛け、入浴時のプライバシーの確保等配慮し、入居者の部屋へ入室する際には、必ず同意を得てから入室するようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	・着る服を選んだり観たいテレビ番組の選択、過ごしたい場所など自己決定できるように働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	・朝食は起きたタイミングで食べられるようにしている。その他は日課に沿ったスケジュールで休憩時間は個別に配慮している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	・好みの服に片寄らないよう季節に合った服をアドバイスしながら選ぶ楽しみも支援している。化粧の支援も行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	・日頃のコミュニケーションや観察から個々の好みはだいたい把握しているため献立に入れている。食事介助が必要な方が増えており、一部の方で食器拭きができるのみである。	管理者が栄養バランスと入居者の嗜好を考慮しながら献立を作成し、生協や近隣のスーパーで食材を購入している。食後の反応や入居者の感想を記録に残し、献立作りの参考にしている。月に2回は入居者の希望により寿司や、うなぎ等の出前を楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	・食事量や水分量はその都度記録し職員間で情報共有することで必要量が摂取できるよう支援している。定期的に体重測定し健康に気をつけている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	・個々の口腔状態や能力に応じて介助方法を統一して行っている。状態に変化があればカンファレンス等で話し合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	・できるだけトイレで排泄できるよう個別に支援している。立位が困難な方に対しても二人で介助するなどできる工夫をしている。	排泄を含めた個々の身体状況の情報を1枚のシートに入居者の変化を記入し、月1回のカンファレンスで一人ひとりに合った排泄方法を検討している。その中で、必要な方には別の排泄チェックリストを記録し、排泄リズムを把握し不快のない排泄の支援を行っている。また、毎朝陰洗を行い尿路感染症の予防に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	・排便の記録を用いて個別に便秘予防の対策を行っている。便秘薬だけでなく冷たい牛乳やヨーグルトなども利用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	・職員配置上一人ひとりの希望に合わせることはできていないが嫌がる時には時間や日にちをずらすなどの対応をしている。	週2回を基本としているが、無理強いせず、入居者のその日の気分を大切に、自発的に入浴ができるような声掛けに工夫をしている。入浴の際は入居者1対1でゆっくり会話を楽しむ時間になるよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	・重度化に伴って体力も低下してきている方には昼食後にベッドで休む時間をつくったり体調に合わせて休息できるようにしたりしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	・薬が変更になった場合は特に観察を怠らず変化のあるなしを看護師に報告している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	・コロナと重度化の影響で外出や外部の人に会う機会が減り、楽しみごと減っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で行っていない。	コロナ禍でほとんど外出をしていないため、体力低下を防ぐために、廊下を歩いたり、午前中はイス体操を3回行っている。午後からは週2回1時間くらい手足の体操と口腔体操を行う。また、行事やレクを増やし、気分転換を図るようにしている。	コロナ禍ではあるが、感染防止対策に配慮しつつ外気に触れる機会を思案されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	・現在は外出の制限がありお金の所持を希望する方もいないため行っていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	・手紙でのやりとりの希望はないが電話での希望がある場合は相手方と相談のうえ、支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	・レクリエーションで製作した作品は廊下やリビングに飾っており、利用者も立ち止まって見ている。ブラインドやカーテンで光を調節しエアコンや加湿器で空調を管理している。	フロアには入居者が共同で季節ごとに作成している作品やレクリエーション時に作成したものを展示している。また、テーブル上のパーテーションや空気清浄機の設置の他、随時玄関や扉を開けているが、1日3回換気を行い、感染防止対策に努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	・気の合う方同士が交流できるよう席に配慮している。時ににぎやかな環境が不快になる方には静かな場所で落ち着いてもらっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	・本人や家族と相談しながら居室に置く物を決めている。	エアコン、カーテン、ベッドは備付で、その他は今まで使用していたものや使い慣れた物を自由に配置している。嫁入りの時の桐ダンス、仏壇等、家族の写真、本や雑誌等、入居者が落ち着いて暮らせる空間づくりがされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	・トイレにはわかりやすく貼り紙をしている。それでも場所や使い方がわからない方は付き添って支援している。		